



Vol.73

机の上の小さな変革



当 たり 前 の 分 解

こんにちは、菅俊一です。私たちが日々行なう行為には、さまざまな手順が含まれているものですが、今回は何らかの行為を「普段とは異なる手順」で実行してみるということをやってみたいと思います。

それでは早速ですが、「ティーバッグを用いてお茶を淹れる」という行為を、普段とは異なる手順でやってみましょう。まずは、普段行なっている手順を書き出すところから始めてみるのがよいでしょう。今回であれば、たとえば以下のような手順が書き出せそうです。

普段の手順

①ポットに水を入れる⇒②ポットでお湯を沸かす⇒③カップにティーバッグを入れる⇒④お湯を注ぐ⇒⑤ティーバッグからお茶を抽出する⇒⑥カップからティーバッグを取り出す⇒⑦飲む

次に、書き出した手順をどうにか強引に別の手順でやってみようとなると、たとえば以下のように変更することが可能かもしれません。

普段とは異なる手順

①カップにティーバッグを入れる⇒②カップに水を入れる⇒③電子レンジでカップを3分ほど温める⇒④ティーバッグを取り出す⇒⑤飲む

この新しい手順にするうえで、普段の手順がお湯を用意することから始まっている点に着目し、強引に水のままでいくつかの行為を進めてしまうように変更を加えてみました。ただ、最終的にはどこかで水を温める必要があるため、今回は電子レンジを用いて手順を組み立ててみました。

その結果、「ポットでお湯を沸かす」と「ティーバッグからお茶を抽出する」という行為で発生する2度の待ち時間を、「レンジで水を温める時間」としてまとめることができました。

これは手順の変更を実行するために、ある行為を別のことに強引に兼ねさせたり、置き換えたりしてやることで達成した工夫とも言えます。

強引な工夫が変化の糸口に

普段、「当たり前」として受け入れていることを刷新しようと思うと、どこから手をつけたらよいのかわからないものですが、行為の手順や物事の順序に着目してみると、動作を詳細に分解してみたり、新しい道具の導入を検討せざるを得なくなるといったことが起こります。

こうした強引な工夫が、今回の待ち時間の減少のような副次的な効果を生み、普段受け入れている「当たり前」を乗り越えるヒントになるかもしれません。

PROFILE 菅 俊 一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。